

日本産 *Chromadora* 属(海産自由生活性線虫)、特に、*Ch. nudicapitata* の形態的変異について
鬼頭研二(北大・理・動物)

On four species of the genus *Chromadora* (Free-living marine Nematoda) in Japan
KENJI KITO

Chromadora 属は海そう上に普通な小型の線虫で、我国では白浜から *Ch. macrolaimoides*, *Ch. brevipapillata*, *Ch. nudicapitata* の3種が記録されている(Wieser, 1955)。この程厚岸・忍路・室蘭・三崎・白浜・天草から得られた本属の個体を検討したので結果を報告する。1. 忍路から我国4番目の種、*Ch. macrolaima* を報告する。本種は large dorsal tooth が特徴だが、Gerlach (1965) が示差した如く、lateral tooth-like projections, weak subventral teeth を確認した。2. Wieser は雌1個体にて *Ch. brevipapillata* と同定したが、雄も調べたところ excretory pore の位置・supplements の数の違いから新種と考えられる。いずれ報告するので、今回は一応 *Ch. sp. A* としておく。3. *Ch. nudicapitata* は各地で採れたが、忍路産と白浜産とでは、supplements の数・位置の個体変異に型の違いがあった。Wieser は白浜産は全て3+1の型と報告したが、忍路等他所同様に4~6個の型もいることがわかった。4. 4種の検索表を考えてみた。A. Large dorsal tooth が顕著 (*Ch. macrolaima*, 忍路) B. Three subequal teeth B—1. Excretory pore は神経環の少し前に開く (*Ch. sp. A*, 白浜・天草) B—2. Excretory pore は頭端近くに開く B—2—a. Esophageal bulb は single, spinneret は短い, 3—5 μ m (*Ch. nudicapitata*, 厚岸・忍路・室蘭・三崎・白浜・天草) B—2—b. Esophageal bulb は double, spinneret は長い: 7—10 μ m (*Ch. macrolaimoides*, 白浜)。

ザトウムシ類における隔離分布
鈴木正将(広大・理・動物)

Disjunct distribution in Opiliones
SEISHO SUZUKI

科 Caddidae および Triaenonychidae のザトウムシは、南・北両半球の温帯に飛び石状に分布する動物地理学的に興味ある群である。

Caddidae は、小型の体の割合に巨大な眼丘をもつなま。亜科 Caddinae は *Caddo agilis* と *pepperella* の2種のみを含み、ともに日本と合衆国東北部、カナダだけに分布。バルト海沿岸には *agilis* によく似た1化石種が出る。Acropsopilioninae (3属10種) は南半球の温帯産だが、最近メキシコ・北アメリカ東部、日本にもおることがわかった。うち *Acropsopilio* は日本、北・中・南アメリカ、ニュージーランドに分布、しかも日本の種 *A. boopis* は北アメリカと共通である。

Triaenonychidae は、後脚跗節の爪に著しい特徴がある小型のリター棲ザトウムシ。本科の分布の中心は南アフリカ南部、オーストラリア、ニュージーランド、一部は南アメリカ南部、北アメリカ西部、日本・韓国まで広がっている。なお東アジアの属種は、北アメリカのそれに強い類縁を示している。

これら両科のザトウムシは、他とかけ離れた形態、著しい隔離分布などから、非常に古い遺跡動物とみなされている。その起原は中生代のジュラ・三畳紀に求められるほどである。当時世界の陸上生物相は割合単純で、同じものがかなり広範に分布していたと推測されている。両科はおそらく旧大陸で生じ、初めは広く連続分布していたが、のちに地質的気候的・変動によって熱帯圏では絶滅、南・北両半球の温帯においてのみ隔離的に残存するようになったのであろう。